女神の事情。

RAM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
女神の事情。

【Ｎコード】
Ｎ１８６４Ｚ

【作者名】
ＲＡＭ

【あらすじ】
国王の王妃第一候補である公爵令嬢アイリーン。彼女のことを人は“女神”と呼ぶ。曰く、我が侭で、傲慢で、情のない美しいだけの娘。それが彼女のねらいであることも知らずに。　ただ愛する人のため、彼に嫌われても“女神”を演じ、彼を護ろうとする女の子のお話。

プロローグ

ウェルンデズ国の若く美しき王には幼い頃から婚約者が居る。

彼女の名前はアイリーン・フェレン。
波打ち光る金の髪、空よりも澄み切った青い瞳。
白磁のようななめらかな肌に、薔薇のような唇。

ある侍女は言う。
彼女は気に入らない人間がいるとすぐに辞めさせる。
先日も、一人の給仕係が職を追われたのだ、と。

ある料理士は言う。
彼女は自分の思い通りにならないと気に入らない。
この前は杯を王とおそろいで高価なものに変えさせたのだ、と。

ある女官は言う。
彼女は情というものがない。
小さな粗相を犯した侍女見習いが一週間折檻され、げっそりと青白い顔で帰ってきたのだ、と。

城の者達は言う。
彼女が王妃になった暁には、豊かで平和な国ウェルンデズも傾き倒れてしまうだろう、と。

そして彼女をこう呼んだ。
美しさを引き替えに悪魔に心を売り渡した気位ばかりの“女神”と。

彼らは知らない。
その噂の裏にひそむ真実を。

彼らは気づかない。
その噂を流すのは、彼女から遠き者達だけだということを。

彼らは見ない。
その噂を聞いて“女神”が微笑んでいることを。

ほんの少しの人たちだけが知っている。
その微笑みが、世界で最も美しく、優しく、そして寂しげであることを。

一人目の協力者（前書き）

女神。１００お気に入り記念（？
こんな雰囲気で行きます。
一気にどばっとあっぷですいません。

そして、主人公は女神ですが、ちょびっとチーパ目線から入ります。

一人目の協力者

チーパ・ポッティは、目立たないように柱の陰に隠れながら、自分以外は華やかな雰囲気の会場を眺め、小さくため息をついた。

（こんなつもりじゃなかったのに。）

昔から社交界というものに憧れていた。

４歳の頃に母を亡くしてからは貿易商の父と共に船に乗り、世界中を旅した。

その生活は各国に様々な仲間も出来て、とても楽しいものではあったけれど、時々見かける馬車に乗った貴婦人に憧れため息をつく普通の女の子でもあった。

父が辺境の地でたまたま発見した、光の当て方によって七色に変わる宝石。この宝石の専売権を得ることができていなかったら、きっと今も船に乗っていただろう。

虹石と名がついたその宝石で巨万の富を得てこのウェルンデズ国に邸を構えた私たちは、ほどなく社交界への出入りが許されるようになった。

世界中にいる仲間からも祝福され、期待にあふれて精一杯お洒落した私のデビューを迎えたのは、厳しい現実だった。

そこにいる人々はみな美しく、雅で、そして冷たかった。

『ねえあなた、猿語ではなくて人間の言葉で仰ってくださらない？』

『これはバーラの言葉よ、そんなことも知らないの？』

『わたくしはパーレス侯爵のいとこにあたるのよ。それで、あなたは？』

上流階級の言い回しも、偉人の言葉も習ったことなどなく、もちろん有力な貴族とのつながりも無い私を簡単に受け入れてくれるほど、甘くはなかった。

父は有力者とのつながりを作ろうと奔走しているし、親しい友人もいない。私の味方など、誰一人としていなかった。

近寄ってくるのは持参金目当ての没落貴族や、若い娘なら誰でもいいというような色ボケ爺。

昔夢見た白馬の王子様のような人たちは、ひょろりと背だけが高い地味な娘など、目もくれなかった。

所詮、別世界だったのだ。

（こうした席に出席するのは今日で最後にしよう。）

夢を叶えてくれた父には申し訳ないけれど、もともと私が有力な婿をつかまえるなんて期待などしていないだろう。

そう決意したとき、突然会場内のざわめきが止んだ。
何事かと柱の影から出たチーパも、自然と会場の入口に位置する階段の上へと視線が惹きつけられていた。

会場内のありとあらゆる人間の視線を一身に受け、優雅に微笑みながら会場内を見渡しているのは。

「女神だ……。」

誰かが恍惚としてつぶやく声が聞こえた。

（彼女が、“女神”…。）
チーパは彼女の姿に目を奪われていた。

聞いたことがある。
堕ちた女神、アイリーン・フェレン。五大貴族の筆頭、ペリーズ公爵の一人娘。
我が侭で傲慢な、世にも美しい娘。

彼女は、噂以上に美しかった。

階段を一歩一歩下りるたびに、緩やかに結い上げられた淡い金の髪が揺れている。
集まった視線に怯むことなく青い瞳で見返し、楽しんでいるようにさえ見える。
彼女の手は赤茶髪の美しい青年の腕に添えられ、二人の周りはまるで空気までもが違って見えた。

その二人を持ち構えるように、階下には何人もの人間が集まりだした。影ではどんな噂をされようとも、彼女は人を惹きつけてやまない家柄と、財産と、美しさをもっている。

（私とは大違い。）

しかも彼女はまさしく白馬の王子様ならぬ王様の正妃第一候補でもあるらしい。噂などの影響か確実といわれた結婚も延び、最近では隣国の王女が本命になっているらしいとも聞くけれど。

（馬鹿な人。）

結婚するまで、我慢でもしてすばらしい王妃候補として演技すればいいのに。正妃になってしまえば簡単には離婚など出来ないのだから。

（私には関係ないけどね。）

あんな恵まれた人も思い通りにならないことがある。少しだけ、いい気味、と思う自分が嫌で、チーパはこっそりと会場を出ようと歩き出した。

一人目の協力者2

人混みを避けつつ歩き、やっと出口の扉が見えてほっと息をついたとき、それは起こった。

一人の貴族風の男がチーパにぶつかり、そのままチーパは斜め前へと突き飛ばされた。

どんっ――――ぱしゃん！

「きゃあっ！」

唖然とするチーパに、悲鳴をあげた少女が勢いよく振り向いた。彼女の目は怒りに燃えていた。

彼女のピンク色のドレスの右袖の下側の一部が真っ赤に染まっている。

どうやらグラスを持っていた彼女の左腕にチーパがぶつかり、中のワインを右腕にぶちまけさせてしまったらしい。自分の顔からさあっと血の気が引いていく。

「も、申し訳ありません。弁償はいたしますから……。」

「それで済むと思ってますの！！？」

少女は目をつり上げてチーパを睨んでいる。
ちらりと周りを見たが、あのぶつかった男の姿は見えなかった。ただし、たくさんの人間がどこか面白そうにチーパ達を見ていた。
他の者は見ないふり、聞かないふりだ。

チーパはこの状況を突破しようと必死に頭を巡らせた。
自分の社交界での評判はもはやどうでもいいが、父の仕事に支障を来したくはない。

「申し訳ないのですが、会場の外でお話ししませんか。ここでは他の方の邪魔になるかもしれませんし…。」
「そうやって、うやむやにしようとしているのね！そうは行きませんことよ！この始末、どうしてくれるのです！！」

チーパは焦りながらも心の中で大きく嘆息した。
相手もこう大きな騒ぎを起こすのは都合が悪いだろうに、箱入りのお嬢様はそんなことには頭がまわらないらしい。
相手にしてきた貿易相手とは話が違う。

どうしようかと途方にくれるチーパに、相手の貴族の娘は無視されたと思ったのか更に顔を真っ赤にさせて怒りの表情を浮かべた。

「ただの成り上がりの娘のくせに馬鹿にして……！！」

どんっ、と肩を突き飛ばされる。
その思いがけない強さにチーパはよろめき、今度は後ろにいた人間にぶつかった。

ぐちゃ、という音がして、次いで皿が床に落ちる音が聞こえた。
布越しに背中に何かが付着しているのがわかる。
斜め下を見ると、料理が載っていただろう皿と、ぽとりとおちたマッシュドポテトが見えた。

（あーあ、もったいない。）
どこか他人事のように考えた。

周りの人間がくすくすと笑っている。
あの貴族の娘が意地悪そうな笑みを浮かべながら、少しワインの残ったグラスを回している。

（あんなに華やかに見えたのに。）

おとぎ話の世界は、こんなに醜かったのか。

突然、凛とした美しい声がその場の空気を裂いた。

「私にも、ワインがかかったのですけれど。」

その場にいた全員がチーパの後ろに勢いよく視線を移した。
チーパものろのろと振り向き、その瞬間呆然として目を見開いた。

（な、なんでこの人が……！）

そこにいたのは、皆が唖然として見つめていたのは、あの“女神”。

ペリーズ公爵令嬢だった。

傍らにあの青年を従え、不機嫌そうに腰に手を当てている。

「待っていたのだけれど、あまりにお話が長いから口を挟ませていただいたわ。

ちょっと見てくださる、ここの所。」

そう言って彼女はウエストのあたりを指さした。淡い水色の彼女のドレスには、ほんの小さな赤い染みが滲んでいた。

（いや、それ私じゃないでしょ……！）

彼女があの場にいたなら、分かっていたはずだ。

そのくらい、彼女には清廉とした圧倒的な存在感がある。

呆気にとられるチーパを代弁するように、右隣に立っている男がおそるおそる口を開いた。

「あの、しかし公爵令嬢。貴女はこの騒ぎが起こったとき会場の奥で主人と会話をなさっていませんでしたか。ワインがかかったとは考えにくいのでは…。」

（この男、あの騒ぎの渦中でも女神を見つめていたのね。）

チーパは呆れながらも、心の中で男の言葉に大きく頷いた。

しかし女神は柳眉を寄せてその男を見やる。

「なあに、私が嘘をついているとでも？」

「い、いえっ、とんでもありませんがっ！」

男は真っ赤になって俯いた。それが公爵令嬢の不興を買ったことに怯えたからなのか、あの美しい目に一瞬でも見つめられたからなのかは定かではないが。

女神はその豊かな胸を張り、ふぅっと息を吐いた。

わかっていないわね、とでも言うように力無く首を振る。

「この騒ぎが聞こえた後にふと見たら、ドレスに赤い染みがついていたのよ。この娘のせいとしか考えられないじゃないの。」

その儚げな美しさに恍惚としている者を除けば、皆の考えはひとつだった。

（ほ、本気……？）

チーパは手のひらに汗が滲んでくるのを感じていた。

女神は悪魔に常識、知性さえも噂以上に引き渡していたのだろうか。

これは、いわゆる『いちゃもん』に過ぎない。貿易相手でこのような人間は何人も見てきた。

けれど、そのときと違って相手は対等ではない。ずっと格上、それも天上の女神と呼ばれる相手だ。

文句を言える相手ではない。

チーパ以外でも、誰もが、口を出せる相手ではなかった。

そう、王族以外では。

「話をしましょう、そこの娘。私についてきなさい。」

女神はそう言いながら不機嫌そうにチーパを見つめ、出口の扉へと歩を進めた。

ひやりと汗が背中を伝う。

（何を私に求めてくるのだろう。）

あのピンクのドレスの娘の方がマシだったのかも知れない。

けれど、ここで逃げては父親の事業は簡単につぶされるだろう。

それだけの権力を持つ相手だ。

重い足をなんとか持ち上げ、俯いたまま彼女の後ろについて歩こうとした途端。

「お待ちなさい！わたくしとのお話は終わってません事よ！」

あのドレスの娘の、金切り声が響いた。

そしてチーパは、この会場のほとんどの者が自分たちに注目しているのに気づいた。

（お父さん、ごめんなさい…。）

ポッティ家が社交界でつながりを築くことは、もう無理かも知れない。

チーパがひきつった顔で振り返ろうとすると、ふわりと薔薇の香りのする人間が隣を通ったのがわかった。
ゆるゆると顔をあげ、それが女神であったことで驚いて口をぽかんと開ける。

女神の結い上げられた金髪は、間近で見ると、さらに美しかった。いや、それはいい。

（なぜ、私の手をにぎっているのだろう。）
チーパの前に立った女神は、目立たないように後ろ手に彼女の手を握っていた。

ぼんやりとするチーパの見えない所で、女神は怪訝そうに眉を寄せ、ピンクのドレスの娘を見やった。

「私にはもうお話しはおわったように思えたけれど？」
「公爵令嬢、その娘はわたくしのドレスをこれほど台無しにしたのですよ！なんの弁償の話もしておりませんわ！」

相変わらず顔を真っ赤にして怒りを表す少女。
女神は心底不思議そうに首を傾げ、床に落ちたままの白い皿を指さした。

「貴女はそれを彼女のドレスにぶつけることでおあいこにしたのでしょう？
なんて素晴らしいと、私感心したのよ。
せっかく仕立てたドレスを汚される痛みを分け合ったのですものね。」

女神は目を細めてふんわりと微笑む。

「そのおかげで、今後誰も相手のドレスを汚そうなんてしないと思うわ。

だって貴女が身をもって、それがどういう結果をもたらすか証明してくださったんだもの。

楽しいはずの夜会がこんな風に白け、ドレスが3着、そしてお料理までもが無駄になってしまうとね。貴女はすばらしいわ。」

誰も何も言えなかった。

無邪気そうに言ったその言葉は、これ以上の夜会の邪魔を、ひいてはチーパへの叱責を許さない響きをもっていた。

悔しそうに娘はくしゃりと顔をしかめ、女神を睨む。

女神はそれを笑って受け流し、チーパの手を握ったまま出口へと向かった。

（この人、本当は、とんでもない策士なのでは…。）

引っ張られるようについていくチーパと女神の後ろから、また金切り声がかかった。

「ならば公爵令嬢、貴女もその娘になにかぶつければいいのでは？」

女神の足が止まった。もちろん手を握られたままのチーパもとまる。

あの貴族の娘はよっぽどチーパを貶めたいか、女神だけなにか弁

償させるだろうことが気に入らないのだろう。

あの少女が貴族であることは胸のブローチで分かったが、爵位は知らない。だが、女神より下であることは明らかだ。

女神の父親は、５大貴族の筆頭なのだから。

こうまで公爵令嬢に、しかもあんなに非道と名高い女神にたてつくなど、何を考えているのだろう。

いや、何も考えていないのか。

女神がどんな言葉を返すのだろうと見つめていると、女神はゆっくりと振り返った。

そして、壮絶に美しい笑みを浮かべてこう言った。

「すでに汚れたドレスを汚しても、楽しくないでしょう？」

二人が出て行くのを、もう止める人間はいなかった。

こうして、女神の“女神”伝説は増えていく。

悪意ある、あの少女のような手によって。

一人目の協力者3

扉を出て、廊下を通り、人のいない階上へとあがる。
女神は無言だった。
チーパも緊張から声を出せなかった。

（どこに連れて行くのだろう。）

やはり公爵令嬢ともなると、屋敷の主人から部屋を簡単に借りられているのかも知れない。
そこで、謝罪や弁償金、父親の事業の優先権などの交渉を行うのだろう。

先ほどのやりとりは、女神が天然なのか計算なのかよく分からなかった。
けれど、この人は噂のような“女神”だけの人ではない。
それは商売上多くの人間を見てきたチーパの勘だった。

人気のない廊下の、最も奥まった場所にある一際豪華な扉を開けた女神について入り、チーパが見たのは、女神のパートナーの青年がソファに寝そべっている姿だった。

（そういえば、この人いつの間にかいなかった…。）

そのあまりにリラックスした姿に唖然としているチーパの手を離した女神は、近くの机の上にあった書類の束を丸め、赤茶の青年の頭をすぱーんと叩いた。それも、かなりいい音で。

「いってー！なにするんだよ、アイリーン！！」

慌てて起きあがり、頭を両手で庇って女神を見上げる青年。

女神は腰に片手をあてて、まるめた書類の束を青年の美しい顔の前につきだした。

「あんたねっ、勝手に逃げるんじゃないわよ！パートナーっていうのは、助け合うものでしょうが！」

「俺があの会場でアイリーンに助けてもらうことなんてねぇだろ！ってことは、俺も助ける義務はない！女の戦いは男は手出しできないって昔から決まってるんだよ、そんなこともしらねぇの。」

「それはあんたのお父様が嫁姑争いに手をだしたくないから作った言い訳でしょ！あんな染みでこの子連れ出してくるの大変だったんだからね！」

ぎゃあぎゃあ言い合う女神と青年。

チーパは愕然とした。

（なに、なんなの。これ、夢なの……？）

背中に残る不快感も、あの感じた屈辱も、すべて夢の中のものなのだろうか。

（だって、そうとしか、考えられない…！）

あの女神が、怒りながら、でも楽しそうに、大口を開けて喚いてる…？

「ごめんなさいね、説明もろくにせずうるさくて。」

そっと背中に当てられたタオルにびくりとして振り返ると、これまた綺麗な女性が微笑んで立っていた。侍女服を着ているが、赤茶色の髪とその顔立ちは、あの青年によく似ていた。

「もうすぐ終わるからちょっと待ってくださいね。」

首をかしげ、水の入ったコップを差し出す。そのときになってチーパは自分の口の中がからからになっていたことに気づいた。

「あ、ありがとうございます。」

「いいえ。」

にこにこと微笑む彼女からコップを受け取り、全て飲み干す。

やっと全身に感覚が戻ってきたように感じた。

「あ、そうだ。」

空になったコップを返す頃になって、女神がくるりと振り返ってチーパを見た。

どくん、と心臓が跳ねる。

「フェンの相手なんてしてあげてる暇なかったのよ。」

女神はそう言ってすっと背筋をのばした。
一気にあの存在感が戻ってきて、緊張に手が震えた。
（言い合っていたさっきとは、別人だ。）

「チーパ・ポッティ。貿易商、ダーダン・ポッティの一人娘ね。間違いない？」

ぞくっと全身に鳥肌がたつ。
（どうして私の名前を。）
会場には１００人以上の人間がいた。まして、チーパは挨拶すらしていない。

「……はい。間違いありません。」

その目を見ていられなくて、赤い絨毯の敷かれた床に視線をおとす。
最初から、仕組まれていたのだろうか。
なにもかも。

ここまで見れば、女神が『馬鹿』なわけでは無いことは分かっている。

すべて、この女神の手の上だったのか。
あの屈辱も、絶望も、すべて。

怯えの震えから、怒りの震えへと変化するのが分かった。

それをただ黙って見ていた女神は、大きくため息をついて傍らの椅子に腰掛けた。

「言っておくけど、あのワインの騒ぎは私は関係ないからね。利用したのは確かだけど。」

女神の隣には赤茶髪の青年がいて、女神を護るように寄り添い無表情でチーパを見ていた。

それを見てかっと頭に血が上る。

（なんなのよ、なんなのよ、そう思うのなんて当然じゃない……！）

「じゃあ何、私に何の用なの。」

自然と声が強ばり、自分の耳にも刺々しく聞こえた。

女神が眉を寄せ、目を細めてやれやれとでも言うように首をふった。

「呆れた。分かってる？

私があの時口を挟まなかったら貴女、完全に道化よ。

父親の仕事の評判も落ち、弁償だってあの傲慢な伯爵令嬢はとんでもない額を要求してきただろうし、二度と貴女は社交界に足の先だって踏み入れることは叶わなくなって」

「分かってるわ！」

チーパは女神の言葉を遮って思わず叫んだ。みるみるうちに視界

が歪む。
そんなこと、分かっていた。
父親に申し訳ないという思いと、悔しさと、それでも抑えきれない憧憬の気持ち。

「昔から綺麗なドレスを着た人に憧れてた！
私が港で商人と値段交渉をしている隣を、日傘を差して馬車で通り過ぎる貴族達！
必死で頑張って、やっと、やっと同じ位置に立てたと思ったのに…！」

ぼろぼろと頬を涙が伝った。

「デビューしても、誰も、私に見向きもしない！話しかければ、無視、か、皮肉しか言われない！
猿語、無知、縁故…！
あ、あんたみたいにね、あんたみたいに、綺麗で、お金も、なにも、かも全部もって、それを、当然、だと思って、いる、人にはわからない…！私の気持ちは、わか、らない…！」

女神も全て失えばいい。
あのむなしさ、寂しさを知ればいい。

チーパがしゃっくりをあげながら顔を覆い、崩れ落ちるのを、女神達は静かに見つめていた。
侍女服を着た娘がハンカチを取り出し、チーパに手渡す。

しばらく経って落ち着き、我に返ったチーパはぼんやりとポッティ家の終焉を悟った。

（天下の公爵令嬢にこの暴言…。しかも、助けてくれたのかもしれない相手に…。）

それでも、すっきりした。

誰もが目を奪われる彼女に、こうまで言ったのはチーパだけだろう。

全てを失う覚悟をして立ち上がり、真っ赤になった目で女神を見たチーパ。

その彼女に、女神はぽつりと呟いた。

「そのドレスがいけないのよ。」

女神も立ち上がり、チーパの前に立つ。

その時になってチーパは、女神が自分より頭半分も身長が低いことに気がついた。

「貴女の黒茶色の髪と目にその緑は合わないのよ。あと、流行を逆行してる。

日焼けを気にしてるのか、白粉が白すぎ。肌に合ってない。

なにより眉のお手入れだって適当。

それじゃあ、誰だって田舎者が背伸びした、って馬鹿にするわ。」

ぽかんと口を開けて見下ろすチーパの額を、女神はひとさし指で軽く押しやった。

「私は美しいって言われるために、努力してるの。
何もしなくて綺麗な人なんてほんの一部だわ。それも維持は難しい。
貴女が何を言われたのかは知らないけれど、みんな上辺を必死に繕っているだけ。
ほんのすこし、ごまかすのが上手いだけよ。」

女神は人差し指についた真っ白な白粉を見て、チーパに、にっこりと微笑んだ。

「お化粧と同じ。簡単に塗れるし、簡単に剥げる。
私が教えてあげる。貴女を立派な貴婦人にしあげてみせる。」

チーパは瞬きを二回して、女神を見つめた。
女神は消えなかった。

（夢ではないの……？）

直々に女神がレッスン？
こくりと口にたまったつばを飲み込む。

「わ、私は代わりに何をすれば…？」

ドレスはただの口実だと言ったようだが、チーパの暴言に対する贖罪もしていない。

助けてくれたお礼もしていない。
しかも、女神は力になってくれるとさえ言っている。
その代償は、どんなもので賄えるというのだろう。
女神はチーパの言葉に一瞬動きを止め、小さく息を吐いた。
青年と、侍女服の娘は辛そうに顔をしかめて女神を見つめている。

女神はまっすぐにチーパの目を見た。

「何でもする？」
「私に出来ることなら。」
「聞いて後戻りは出来ないのよ？」
「覚悟の上です。」

もとより女神は、全てチーパから問答無用で奪える立場だ。
この国は、ピラミッドの下が上にたてつくことを許さない。

女神が微笑んだ。
その笑顔はとても美しくて、優しくて、悲しげで。

チーパは顔に血が集まるのを感じていたが、次の言葉を聞いた途端、全ての熱は霧散した。

「私が全てを失うために、手助けして欲しいの。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1864z/

女神の事情。

2011年12月11日23時34分発行